

第31号 華山会報

平成25年11月1日

公益財団法人華山会

渡辺華山先生の顕彰

公益財団法人華山会理事長 鈴木 愿



財団法人華山会は、明治四十三年（一九一〇）に「華山会」として創立されました。昭和六十三年（一九八八）四月、財団法人華山会として生まれかわり、当時、建設計画が始まった田原町博物館と共に、華山先生の顕彰事業に取り組んできました。平成二十五年四月からは、公益財団法人の認可を受け、六月に財団法人華山会理事長白井孝孝の後を受け、理事長に就任いたしましたので、『華山会報』紙上で皆様にごあいさつをさせていただきます。

市民・県民の皆様をはじめ、より多くの方々に「渡辺華山の優れた武士、文人、画家、経世家、憂国の先覚者としての活躍を顕彰するため、その生涯における活動の記録その他関係資料を調査、研究し、広く一般に公開するとともに、華山の遺徳を継承して、平和で豊かな社会づくりに貢献すること」という目的は財団法人の時と同じです。

田原の地におきます渡辺華山先生の顕彰活動の始まりは、明治二十三年（一八九〇）華山五十年祭でした。明治十九年、旧田原藩士族の金田正名（一八五〇～一九四〇）氏が惣代となり、「華山翁記念碑建設旨趣」を発行し、寄付金募集と碑建設の経緯が明らかにされています。当時の愛知県知事、勝間田稔（一八四三～一九〇六）氏が「三河地方で碑を建てるのであれば、まずは渡辺華山翁のものだろう」と言ったそうです。以後、華山先生が晩年を暮らした池ノ原公園の整備、『華山全集』等刊行物の発行などを行いました。財団法人となってからは、華山先生の代表作『一掃百態』の複製作成や伝記本である『華山渡辺登』『少年物語渡辺華山』の刊行で、よりわかりやすく、華山先生の姿を皆様に伝えようと努力して参りました。華山先生顕彰事業の一環として、平成十年十月から『華山会報』を年に二回発行することとなり、全国の華山研究者の方や崇敬者の方々と結ぶ機関誌として、華山・史学研究会と田原市博物館の編集で、皆様方の手元にお届けできることは、当公益財団法人の活動をご理解いただくためにも、意義あることと考えています。

また、今年、華山先生生誕二百二十年であり、児童でも使える華山会館や田原市博物館周辺を採訪するための『渡辺華山史跡めぐりマップ』を作成しました。田原市も参加している嚶鳴協議会で、七月に開催したことも嚶鳴フォーラムin沖繩市に『少年物語渡辺華山』で学習した児童が参加し、田原市の誇る偉人である華山先生の志と行動力を発信してくれました。ふるさと学習の一助となるように、田原市民まつりでも、毎年恒例となった地元小学生による華山先生を題材にした作文の表彰も行われました。公益財団法人として今後もなお一層、渡辺華山先生の顕彰活動につとめてまいりますので、これからもご支援ご協力をお願いいたします。



華山、虎二郎、そして山本雄二郎

田原市教育長・田原市博物館長

嶋津隆文

(松蔭大学客員教授)

山本雄二郎。三年前に新宿で永眠した田原の大先輩です。享年79歳。こじれきった流血の成田空港問題を収束させた人物であっただけに、東京プリンスホテルでの葬儀には千余人が集まりました。挨拶は千葉県知事、元運輸事務次官らが行い、空港反対同盟の人達も多く列しました。その山本の生涯をまずは葬儀の案内状で紹介しましょう。

「山本雄二郎先生は愛知県渥美半島に生まれ、早稲田大を卒業し産経新聞の政治部の記者として活躍。退職後、高千穂商科大教授として教育に携わります。その一方で航空政策研究会の事務局長として新たな航空政策を発表し、更には福島空港、北九州空港、中部国際空港など日本各地の空港整備に足跡を残しました。何と云っても、先生が航空界にその名を残したのは成田空港であり、先生抜きには成田問題を語ることはできないと言って過言ではありません。

ん。61歳の時に学識経験者として成

田空港問題シンポジウム、円卓会議に参加し、20数年対立していた反対同盟と国側を和解へと導いたのです。その後も共生委員会の代表として空港と地域の架け橋となりました。今では成田空港は「地域の大切な資源」と言われ、わが国最大の国際拠点空港になりました。私たちは先生の「共生から共栄へ」という理念を受け継ぎ、成田空港を将来にわたって国民や地域に愛される空港に育てていきたいと思っております。山本には亡くなる直前までの20数年、昼夜SP（特別警護）が配されました。過激派のテロの脅威に常に晒されていたのです。にも拘らず実に足繁く成田に通いました。そんな山本を読売新聞は「成田に招かれた人柄」と追悼し、朝日新聞は「成田に泥臭く寄り添い続けた」人物と称賛しました。

山本はなぜそこまで献身的であったのか。関心を持った私は彼の足跡を追い、この春に『成田の大地と渥美の空―評伝・山本雄二郎』（産経新聞出版）を刊行しました。そこで私は、山本の行動には郷土の風土と華山と岡田虎二郎の影響があったことに気付き、大いに興奮するので

す。

「渥美半島の自然の中で育った僕は、反対派が持つ土の感覚が自分と似てると思った」（朝日新聞）と山本は語っています。現に渥美半島の「寄り合い」の風習などを例に、政府と農民にじっくり話し合うことの大切さを説き続けました。また成章中学校時代に学んだ華山の領民への精緻な配慮を、そのまま山本は成田の農民への接し方の基本としました。加えて驚かされたのは静坐法の岡田虎二郎の存在です。成田の反対派農民にとり、土地収用に苦しめられた足尾鉍毒事件（明治30年代）は成田闘争と二重写しとなっていました。その反対運動のリーダーで農民から義人と称された田中正造。その正造が心の拠り所としていたのが何と田原の岡田虎二郎であったのです。山本はこうした時空を超えた田原と成田の結びつきに驚き、その不思議な縁を自らの運命として、時に苦境で沈みかねない気持ちを奮起させていたのです。

山本雄二郎という人物だけでなく、渥美半島の風土と華山、虎二郎の存在が国家的難題であった成田問題を収束させたと考えると、実に痛快という外ありません。

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P① 渡辺華山先生の顕彰

鈴木 愿

P② 華山、虎二郎、

そして山本雄二郎

嶋津隆文

目次

P③ 画家渡辺華山の心象

P④ 渡辺華山『毛武游记』⑧

P⑧ 「少年物語渡辺華山」読書

感想文について

P⑫ 華山の田原行(十五)

P⑭ 華山会報索引

P⑯ 公益財団法人華山会

田原市博物館 からご案内

画家渡辺華山の心象

風竹図 個人蔵

天保九年（一八三八）

絹本墨画

縦一三九・四cm×横八四・八cm

左からの風を受ける竹を描く。鄭板橋（一六九三〜一七六五）の詩を引用して画賛としている。華山が描く竹の図に添えられる詩としては「鄭老畫蘭不畫土 有為者必有不為 醉來寫竹似蘆葉 不作鷗葉無節枝」がよく使われているが、この鄭板橋は墨竹・墨蘭を得意とした清の文人画家であり、地方代官として窮民救済を行ったことでも知られ、この画を求めた吉沢松堂（一七八九〜一八六六）に、その意を汲み、貧しき者を庇護せよとの意味を込めている。賛は七言絶句で、「衙齋臥聽蕭々竹 疑是民間疾苦声 些小吾曹州県吏 一枝一葉総関情」とある。『佐野市



立吉澤記念美術館コレクション選」
「吉澤コレクション」の近世絵画―文人画を中心に―（河野元昭氏）によれば、その意味は「役所の部屋で横になり、風に鳴る竹のさみしい音を聴いている。それはまるで人々が発する悲しみの声のようだ。下級とはいえ、われわれは地方官なのだ。竹の一枝一葉が、みな気にかかる。」というもの。

また、賛文の次に、「余以不敏參

藩政時天保七年大風雨火八年又風大饑民飢我 君発稟賑濟無一餓卒可謂仁政余每讀此 詩警省以自勗恐有溺其職也松堂望発索画并録之 松堂佐野農人富而好義若推此意以庇貧者我画不啻風竹也」と添えられる。こちらの意味は「私には才能もないが、藩政に携わってきた。天保七年には台風、翌八年にまた台風がきて大飢饉となり、人々は飢えに苦しんだ。我が藩主（三宅康直）は米蔵を開い

てこれを救済したので、一人の餓死者も出なかった。これこそ仁政といふべきであろう。私はつねにこの詩を読んで戒めとし、地位に安穩としないようにしてきた。松堂は佐野の農民で、豊かに富または義（公共心）を好む。どうぞ、この詩の意味をよく理解して、貧しいものを助けてほしい。私の画は、ただ風竹を描いただけのものではないのだから。」

款記に「戊戌八月二十有七日秉燭寫華山外史」とある。白文方印の「華山樵者」と瓢箪形朱文の「登」を捺している。田原藩が天保の飢饉の際、功を奏した報民倉の建設に対して、幕府からの褒詞を賜った十日後のことで、江戸へ上った松堂に華山が贈ったものである。

田原市博物館副館長学芸員

鈴木利昌

渡辺華山『毛武遊記』⑧

研究会員 加藤 克己

十六日 晴

宵より行厨など用意して、大間々といふ処のこななる要害に登ると、茂兵衛、梧庵、喜太郎、庄次郎、弥助とを従ふ。堤村谷仁右衛門は茂兵衛が親兄弟あれば訪ふ。谷といふは桐生大炊助の臣、四天王の一なり。其子孫此村に残りて同姓多しといふ。此家農なれど、かたはら機を設けて縮緬を織る。其法を聞、別二しるす。

天保二年（一八三二）十月十六日 晴

夜のうちから弁当などを用意して、大間々といふ所の手前にある要害山に登ろうと思ひ、茂兵衛、梧庵、喜太郎、庄次郎、弥助とを従えて出かけた。堤村の谷仁右衛門家には茂兵衛の親兄弟がいるので訪れた。谷というのは、桐生大炊助の家臣で、

十山亭（小倉山）から見た風景

右から順に赤城、三国、榛名、伊香保、天王宿、浅間、甲州、武とある。

渡辺華山「毛武遊記図巻」（常葉美術館蔵）より



四天王の一人である。その子孫はこの村に残つていて同姓が多いという。この家は農家であるが、その一方で機を設けてちりめんを織っている。その方法を聞いたので、別に記す。

※ 大間々 上野国山田郡大間々村（群馬県みどり市大間々町大間々）。文禄年間（一五九二—九六）に桐原村（みどり市大間々町桐原）から分郷したという。その後の大間々村の発展については『毛武遊記』も触れており、次号に記す。

※ こなたなる 要害山のある高津戸は、現在は大間々町の一部であり、「大間々」という所にある要害」となるはずであるが、当時は大間々と高津戸は別の村だったので、このような表現になった。

※ 要害 要害山。標高二七〇m。頂上付近に高津戸城跡がある（みどり市大間々町高津戸）。

※ 堤村 上野国山田郡堤村（桐生市堤町）。

※ 谷仁右衛門 三代岩本茂兵衛の兄。華山来訪時、父仲右衛門はすでに亡くなっていた。

※ 谷 桐生氏の家臣で荒戸村に帰農したという。堤村の名主を務めた豪農。

※ 桐生大炊助 桐生城主。桐生祐（助）綱、直綱とも称す。桐生氏第九代の武将。桐生氏の領地拡張は、祐綱の時代に絶頂に達したようである。永禄十三年（一五七〇）、祐綱の死後、

養嗣子親綱の暗愚のため、内政は紊乱、将士民心は離反。由良成繁に滅ぼされる。

※ 縮緬 横糸に強いよりをかけて、織り縮ませた絹織物。

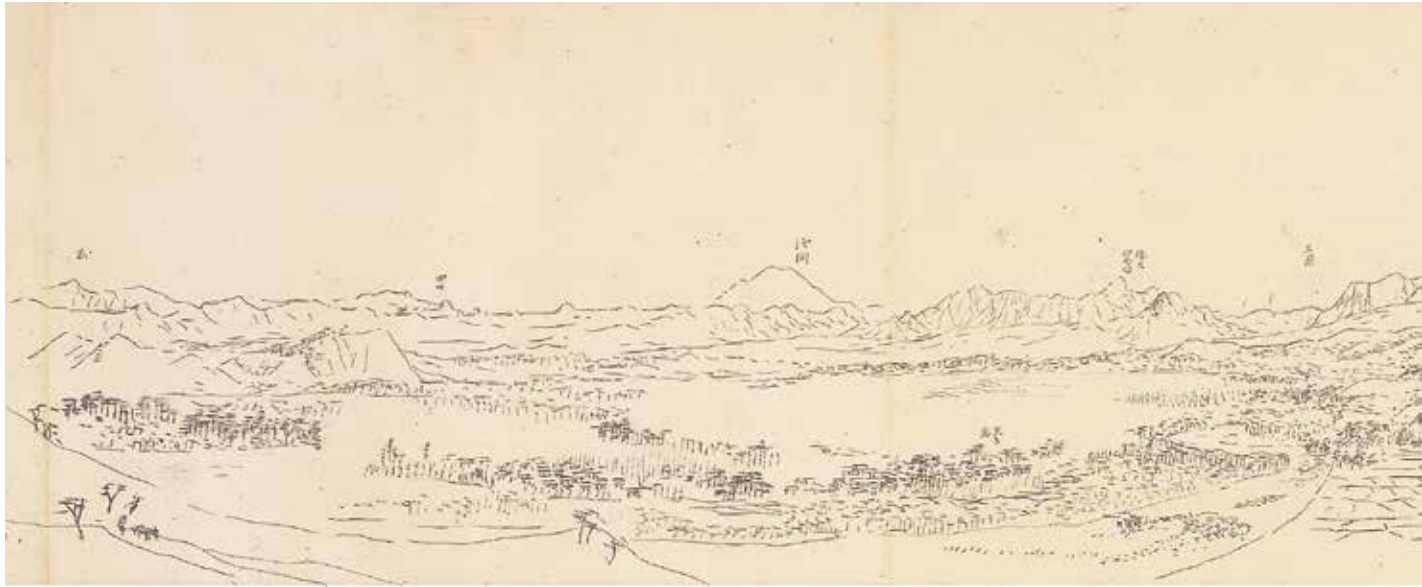
堤村去^ハ桐生^ツ南半里弱、吾妻山之背也。

堤村は桐生から南（実際は西）に半里（約2km）弱離れた所であり、吾妻山を背にしている。

※ 吾妻山 桐生市堤町・宮本町・川内町の境の山。標高四八一m。

赤岩山（富士山） 手前は渡良瀬川。





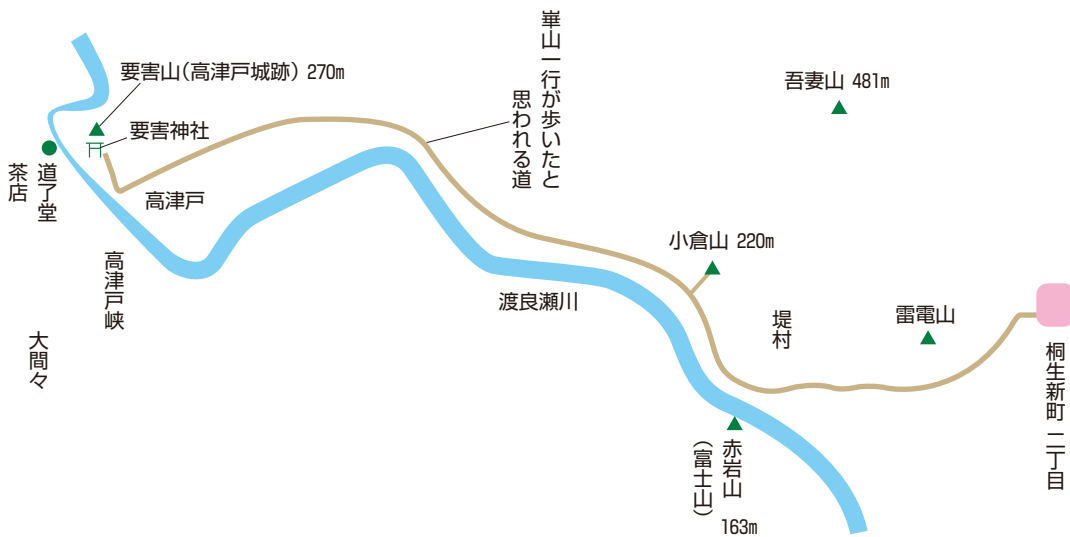
出て山間を行、下に一水を見、又一独山を見、これ赤岩山といふ。山足皆巨石、形猊のごとく、水中に並び立、景甚奇なり。又行、愈高し。山越をきり徑を通ず。山の名小倉、此山上に詩人淡齋、亭を建て十山亭と名く。其勝、概郷中第一の所なれば也。

(谷の家を) 出て山間を行くと、下に一つの小さな流れを見、また一つの独立した山を見た。これは赤岩山という。麓は皆大きな石で、その形は唐獅子のようであり、水中に並び立っていて、景色はたいへん珍しい。また行くと、いよいよ高くなる。山の腰を切つて道が通っている。山の名は小倉、この山上に詩人(佐羽)淡齋が亭を建てて、十山亭と名づけた。その景観が概ね郷の中で一番すばらしい所だからである。

- ※ 一水 ここでは渡良瀬川のこと。
- ※ 赤岩山 富士山(ふじやま)。渡良瀬川の中流右岸の下新田村(桐生市相生町)に孤立する小丘。標高一六三m。上毛電鉄「富士山下」駅がある。駅の標高約二二〇m。
- ※ 山足 麓。
- ※ 猊 唐獅子。
- ※ 水中に並び立 富士山は渡良瀬川に接している。北側の麓の石は水中から立っているといえる。
- ※ 小倉 小倉山。山田郡東小倉村(桐生市川内町)。標高二二〇m。佐羽淡齋の十山亭があった。
- ※ 淡齋 佐羽淡齋。前々回(第29号)参照。

桐生から大間々略図

華山一行は、渡良瀬川の北の道を歩いたと思われる。小倉山と高津戸との間の記述がない。



亭は風のために破壊され、かたちなし。唯詩碑のこりたるを要害山にうつし、今ここになし。さて此十山と名するゆへは、赤城、三国、妙儀、榛名、浅間、日光、碓氷、破風、三峰、富士等一囑に尽くればかくハよべる也。

亭は風のために破壊され、すでに形はない。ただ詩碑が残っていたのを要害山に移し、今ここには(詩碑も)ない。さてこの十山と名づけたゆへんは、赤城、三国、妙儀(義)、榛名、浅間、日光、碓氷、破風、三峰、富士等が一望できることからこのように呼ぶのである。

※ **赤城**： 赤城、三国、日光については、第四回(27号)参照。

※ **妙儀** 妙義山。群馬県南西部、甘楽郡妙義町・下仁田町と碓氷郡松井田町にまたがる山塊の総称。最高峰は谷急山で一一六二m。妙義・榛名・赤城の三山を合わせて上毛三山という。
 ※ **榛名** 榛名山。群馬県中部、吾妻郡・群馬郡・北群馬郡にまたがる三重式火山。最高峰は外輪山掃部ヶ岳で一四四八m。

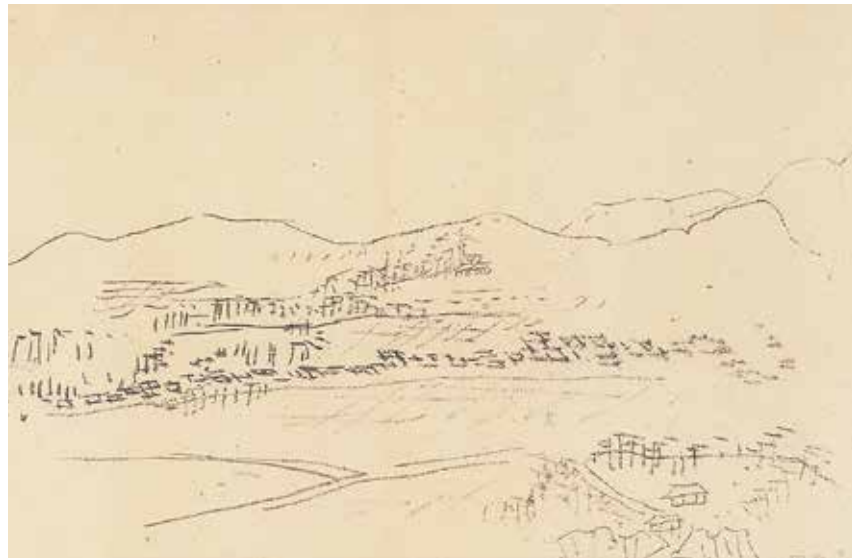
※ **浅間** 浅間山。群馬県北西部、長野県との境にある複合成層火山。標高二五四二m。
 ※ **碓氷** 碓氷峠。群馬県西部、長野県との境にある峠。中山道の險路。標高九五六m。

※ **破風** 破不山。破風山とも書く。埼玉県秩父郡大滝村・山梨県東山梨郡三富村の境界に立つ山。標高二三一八m。

※ **三峰** 三峰山。埼玉県秩父郡大滝村の東にある山。標高一〇二m。

要害山上から見た風景①

渡辺華山「毛武游記図巻」より



携へ来れる壺を出し、一酔して山を下る。山下ハ即わたら瀬川、川につき山にそひて行。高津戸といふ。これ天正の頃里見一族の居住せし所といふ。居城の地は山上にて、むかしはいかに称えしや、今ハ要害山とて上、八幡の(上の欄外に「今金比羅」)社あり。

携えてきた酒壺を出し、一酔して(小倉)山を下った。山の下は即渡良瀬川である。川べりを山に沿って行く。高津戸という所に出た。これは天正の頃里見一族の居住した所という。居城のあった地は山上であつて、昔はどのように呼んだのであろうか。今は要害山といつて、上に八幡(今金比羅)社がある。

※ **高津戸** 上野国山田郡高津戸村(みどり市大間々町高津戸)。渡良瀬川の中流左岸、大間々扇状地の扇頂部に位置する。大間々往還筋に高津戸の渡しがあつた。

※ **天正** 一五七三―九二年。

※ **里見一族** 新田義重の長男義俊に始まる。名字の地は、上野国碓氷郡里見郷(群馬県群馬郡榛名町)。その子義成は源頼朝に従つた。その子孫の里見随見勝政・平四郎勝安兄弟が天正年間に高津戸城に拠つたとされ、兄弟の墓といわれる五輪塔が存在するが、それを裏付ける同時代史料はない。

※ **八幡(今金比羅)社** 現在は、要害神社と呼ばれている。

※ 要害山へ登つたことの記述がないが、以下に山上からの眺望を記述している。また、華山は山上で何枚かスケッチをしている。

社の後に大きやかなる石、半地にいりていとゆえゆえしく、しめなど打かけて名(空字)といふ。山下は渡良瀬川の水上に左右より巖競ひ出て、河中に攢立す。いはゞものゝふの剣もて戦ふ如く、急流これにせかれて百千の玉となり、



要害山上から見た風景②

右から順に、ヲクロミタケ、里見瑞見古城要害山より赤城を見、荒井孫兵衛、大野、小野とある。

渡辺崋山「毛武遊記図巻」より

瑠璃なせる水と照り合ふたるさま、筆にも詞にも及ぶまじ。むかひに道了権現の社あり。近頃土人勧進して社をもふけ、又籠り堂とて男女あつまり宿願す。茶店ハ水にのぞミ、い(と)淨らかなり。これ皆要害山上の一望の中景なり。

社の後のかたにいたりて酒汲かわせ、時移るま、下る。社のかたはらに住すてし庵あり。傍に小社あり。むかしこの社の内にたれか甲にやありけり、いとさびくされたるありしが、今ハいかにと開き見るに、たゞ白弊(幣)あるのみ。

(山上の)社の後ろに大きな石が、半ば地中に埋まっていたいへん由緒ありそうな様子で、しめ縄などを打ちかけて名を(空白)という。山の下は渡良瀬川の水上に左右から岩石が競い出て、川の中に群がり立っている。言ってみれば武士が剣を持って戦っているようで、急流はこれにさえぎり止められて百千(たぐさん)の玉となって、瑠璃色になった水と輝きあったありさまは、筆にも詞にも言い尽くせないであろう。(川の)向かい側に道了権現の社がある。近頃地元の人が寄付を集めて社を作り、また籠り堂といって男女が集まって願掛けをする。茶店は水に望んだ所にあり、たいへん清らかである。これらは皆、要害山上で一日に見渡した中の景色である。

社の後ろの方へ行つて酒を酌み交わし、しばらく時を過ごして山を下った。社の傍らに住み捨てられた庵がある。そのそばに小さな社がある。昔この社の中にだれの甲であったのであるうか、たいへんさび腐れたものがあつたが、今はどうなっているだろうかと開いてみると、ただ白い幣があるだけである。

※ **むかし……** 昔は甲があつたと、まるで華山が見たことがあるかのように断定的に書いているが、一行のだれかが見たのであろうか。

追記

桐生市桐生新町重要伝統的建造物保存地区

華山の滞在した岩本家の所在地を含む「本町一、二丁目及び天満宮周辺」が、平成二十四年七月、国の「重要伝統的建造物保存地区」に選定されました

(続)

- ※ **ゆえゆえしく** 由緒ありそうな。
- ※ **攢立** 群がり立つこと。

※ **道了権現** 宝暦二年(一七五二)、相模国足柄上郡関本村(神奈川県南足柄市大雄山町)の最乗寺道了尊の分霊を祀つたと伝える。昭和二十二年(一九四七)のキャサリン台風による水害で、渡良瀬川沿岸にあった道了堂は、周辺の滝の湯、茶店もろとも流されてしまった。平成十五年(二〇〇三)、現在地に移転、再建された。みどり市大間々町大間々。

「少年物語 渡辺華山」

読書感想文について

公益財団法人
華山会では、郷土の偉人渡辺華山先生の功績を後世に伝承する事業の一環として、毎年市



内小学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子をプレゼントしてまいりました。感想文の募集を行ったところ、六十三件の応募をいただきました。

この中から優秀賞に選定されました六点の作品をご紹介します。

応募いただきました学童の皆さんやご協力をいただきました各学校の先生方々に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人華山会事務局

少年物語 渡辺華山を読んで

神戸小学校 六年 大羽 琉 生

ぼくは、生まれも育ちもこの田原市です。渡辺華山先生は、田原市の有名な人なので、てっきりぼくは田原の出身の人なのかと思ったら、生まれも、育ちも江戸の人だったのでびっくりおどろきました。

華山先生は田原藩の家老で、それで、ぼくのこの田原市と深いむすびつきがあることがわかりました。

小さいころから家は、食べる物にも困るくらいのおいびんぼうで、大変苦労して、成長しました。子供のころから、お勤めに出て、毎日のわずかな時間でもいっしょうけんめいに勉強して絵の勉強もして、いつでも、親孝行することを考え、自分のまわりの人たちの幸せを思い、人生一生、死ぬまで、努力しつづけてがんばった人だと思いました。

今、ぼくの住んでいる田原市は農業、漁業、工業でもさかえている、とてもめぐまれた土地だと思います。だから華山先生ころの田原藩がすごくびんぼうな、藩だったなんて、とても思いませんでした。今のこの豊かな田原市があるのも、華山先生が田原藩のために、自分の命をかけて、守ってくださったおかげだと思いました。やっぱり、ぼくは、華山先生は、ほかの人たちとはちがうと思いました。ふつうなら、お金がたくさんほしいから、自分の絵が高いいねだんで売れるのだから、高く売るのがふつうなのに、安く売ったり、自分もびんぼうですごく困っているのに、「報民倉」にお米をきふしたり、毎日がすごくいそがしくて、それでもびんぼうでふつうの人ならぜったいに、くじけてしまうとします。だけど、こ

んなに大変な、生活でも、やってこられたのは、大好きな勉強と、絵と、すばらしい先生方や、友だちに、めぐまれていたからだと思います。

だから、華山先生が、罪人あつかいにされてろうやに、入れられた時でも先生方や、友だちが、どうにかして華山先生をたすけようと、ひつしになって、がんばりました。華山先生を大切に思う、このみんなの思いは、お金では、けっして買えないものだと思います。華山先生は、すごくびんぼうでも、人々を大切に思うやさしい人がらで、かけがえないものを、買ひ物したと思いました。

ことわざで、「出るくいはうたれる。」と言うことがありますがこのことわざの通り、華山先生がりっぱすぎて、人よりも、目立っていたので、華山先生を、よく思わない人から、ねたみや、うらみをかい、うその、わるいうわさを流され、罪人にされてしまい、この田原にやってきました。どうして、どの世の中にも、このような人がいるのかと、とても悲しく思いました。これが原因で病気になるさいごは、自分の周りの人々のことを、考え自殺してしまいました。華山先生のととても悲しいさいごに、すごく悲しくなりました。せつかくこの田原にきたのだから、のんびりとすごして病気をなおしてまた元気になってこの田原のために、がんばって、働いて欲しかったのです。華山先生がもつと長く生きていたら、歴史はどのように変わっていたのでしょうか。現代にも華山先生みたいに、世の中の先が読めてかしこい人が必要だと思えます。今の日本や、田原を見て、華山先生は何と申うでしょうか。ぜひぼくは華山先生の意見が聞いてみたいのです。ぼくは、渡辺華山先生の本を読んで、先生のおいたちや、田原藩のため行なってきたことや、たくさんすばらしい絵を残したことなど、たくさん勉強する

ことができ、本当に良かったと思えました。華山先生は、みんなに自まんで、田原市の宝物だと思います。そんなすばらしい田原市に生まれたぼくは、これからは華山先生のように、親孝行して、友達も大切にがんばって勉強したいと思えました。

「渡辺華山」を読んで

中山小学校 六年 折戸 駿太

ぼくは、「渡辺華山」を読むまでは、華山先生は田原市で有名だけど、どんなことをした人なのか知りませんでした。画家や学者、武士など、たくさん顔を持つ華山先生におどろきました。

「渡辺華山」を読んで、すごいなあと思ったのは、貧乏だったのに、たくさん勉強して、田原藩の家老にまでなったことです。もし、ぼくだったら、ノートがなかったり、教科書がなかったら、勉強しようとは思わなかっただろうと思いました。

画家としての華山先生は、小さなころから絵が得意でした。つねに紙と筆を持って、いつでも気になったものを絵に描いたりしていたそうです。貧乏で、弟子入りを断られたときでも、決してあきらめず、絵を描き続けた華山先生。ぼくは、困難な状況でも、あきらめずに続けることの大切さを学ばせてもらいました。

次に、武士としての華山先生について、印象に残ったことは、ききんに備えて報民倉をつくったことです。報民倉の中に米などをためておいて、ききんで米が収穫できないときに、みんなの命を救いました。一人の死者も

出さなかったことは、すごいことです。自分のことよりも、みんなの幸せを願っていた華山先生だからこそ、報民倉を考えることができたのだと思えました。

田原市には、この報民倉をもとにつくられた防災倉庫があると、ぼくはお母さんから聞きました。災害に備えて、田原町にある大手公園の中につくられたもので、災害が起きたときに役立つものや食料が入っているのだそうです。本当は、地震や津波なんて来ないほうがいいけど、いつ起こるか分からないから、備えることは必要です。華山先生の、もしものときに備えるという考えが、今の時代にも生かされていると感じました。

最後に、本を読んで、一番驚いたことを書きます。無実の罪のために、命を落としてしまったことです。華山先生は何も悪いことをしていないのに、人からなたまれて、やってもいけない罪に問われ、ろう屋に入れられてしまいました。そして、ろう屋から出て、田原に来てから、自殺してしまっただけで残念でなりません。もっと田原のために生きてほしかったと思えました。

今回、ぼくは「渡辺華山」を読むことができて良かったです。本は、難しかったけど、頑張って最後まで読んでみたら、華山先生の偉業を知ることができました。

ぼくたちは、華山先生が生きた時代よりも恵まれていると思います。勉強する環境や、生活の環境も整っているからです。今までは、当たり前だに思っていたけど、両親にも感謝しないとけないと思えました。それから、ぼくは、華山先生のように絶対になれないけど、これからは、自分でやろうと決めたことは、最後までやりとげるように頑張ろうと思いました。

華山先生の生き方に学ぶ

田原中部小学校 六年 賈 清宇

ぼくは、五年生の時に夢育活動（総合）で華山先生について勉強し、いろいろなことを知り学びました。そして、今年、「少年物語渡辺華山」の本をしっかり読み、あらためて華山先生の生涯を振り返りました。

ぼくにとつての華山先生は、あきらめない、心の強い人です。十二歳の時、大名行列にぶつかり、家族や殿様のことを思い何回も謝ったり、ぶたれたりして、身分のちがいをいやというほど知りました。それなのに、華山先生は少しもへこたれず、むしろ世の中の役に立つ人になると志を立てて、それを実行し、努力して大人になってその志をかなえることができました。それから、何度ものつらいことがあっても、それを目標に変えて努力したので、とても心の強い人だと思いました。ふつうの人はつらいことがあたらへこたれてしまうのに、華山先生はとても前向きに努力を重ねていました。ぼくはそのときの華山先生と同じ年だけど、今の自分ではそれは難しいと思います。でも一歩でも近づけるよう、目標を立てて、華山先生のようにあきらめずに努力しようと思います。

華山先生は、思いやりのある人です。先生が家老になった年に紀州はんの船がなん破して、荷物が渥美半島の表浜海岸に打ち寄せられ、海岸近くに住む人たちがその荷物を拾ってしまいました。しかし、そのころの紀州はんは、日本のどの様の中でも最も勢力が強かったため、へたをするとみんな打ち首になってしまうという事件が起こりました。そこで華山先生は必死で紀州はんにわけ

を話し、少しのお金で村人を助けることができました。そのお札に村人がお金を出し合って華山先生の所に持ってきました。しかし、華山先生は村のために使ったくさいとお金を返しました。このように、華山先生は、とても優しく、人を思いやる人です。

それに、華山先生は、先の先を見通し、勇気があって、とても立派な人です。大ききんに備え「報民倉」という倉を建て、食料をたくわえていたおかげで、田原はんでは一人もうえ死にする人はいませんでした。また、蘭学を学び、日本の国を助けようと幕府に開国を唱えました。そのため、先生は罪人になってしまいました。でも、あとになってみると先生の考えは正しかったのです。勇気を持って正しいことを言う華山先生は、人間として本当に立派です。

ぼくは、今年の夏休みに華山先生の素晴らしさや優しさを伝えようと、沖繩に行って発表してきました。先生の生き方から学んだことを、いろいろな人にしっかりと伝えられたことをうれしく思います。

そして、ぼくは華山先生のようにもつと努力して、人を思いやることのできる立派な人になれるようにがんばっていいこうと思います。

「渡辺華山」を読んで

清田小学校 六年 川 口 由 貴

渡辺華山先生には、病気の家族や、六人の弟や妹がいました。生活は貧しく、一人でも人数を減らすため、妹や弟を、武士の家やお寺に奉公に出しました。そうすると、

そのまま一生会えない事もあり、とても悲しい別れでした。私のお母さんは、六年生の時の学芸会で、「華山劇・板橋の別れ」という劇をしたそうです。今でも田原市内の学校で演じられる、とても有名な話だそうです。九歳だった弟との別れは、華山先生にとつて、とても悲しいでき事でしたが、決してくじけませんでした。大変な事、悲しい事、つらい事があるたびに、力をふりしぼって、気持ちをしっかり持ちました。必ずりっぱな人になって、家族をしあわせにしてやろうと思いました。そういう家族や周りの人生に対する、やさしい気持ち、それから華山先生の人生のささえや、がんばる力になったのだと思います。

華山先生は、十二歳の時、びんぼうだったせいで、つらい経験をしました。そこで学問の道でがんばり、殿様に教えることができる先生になりたい。殿様の上に立てるようにするために、学者になろうと勉強しました。が、「それでは、今のくらしを楽にすることはできない。」と知り合いの意見を聞いて、得意な絵を勉強して、それを売って生活をしました。忙しいお城の仕事をしながら、努力をしたたくさんのすばらしい作品を作りました。すごいと思うのは、仕事も絵も他の勉強も何もかも真剣に取り組んだことです。そして、それが全部すばらしく進歩したことです。

今の私は、学校や部活で疲れると、宿題やじゅくがイヤになったり、ちよつといいかげんになってしまうことがあります。一つをなまけると、他の事もやっぱりめんどうになってしまいます。これではいけない、と思います。特にこれから中学生になるので、いろいろな事を、バランスよく両立していこうと思います。

まだ自分が将来何になりたいという夢は、決めてない

けど、何を指す時でも、先生のように、あたえられた事、全てを一生けんめいする事、今やるべき事をがんばる事が、とても大切だと思います。そうする事で、夢に一步步近づけると思います。

また華山先生は、絵の勉強、特にヨーロッパの絵画を研究しているうちに、外国の他のことも知るようになりました。その時代には周りにも認められず、罪人あつかいされ、自殺をすることになりました。時代が進んで、言っていた事が正しいとわかり、とてもかわいそうだと思います。

私は、これまで華山先生の名前も知りませんでした。一生をかけて、家族、友人、恩人を思いやり、最後まで本心にすばらしい生き方をした人だと思いました。

機会があったら、博物館や神社などをめぐり、実際に華山先生の絵とかも、見てみたいです。田原の為に、人生を、命をかけた思いを少しでも、感じたいと思います。

渡辺華山

清田小学校 六年 朽 名 要

ぼくは、この本を読むまで、渡辺華山という人を知りませんでした。今から220年前に生まれて、田原藩の家老を務め、画家としても有名な人だったそうです。貧ぼうな家庭だったので、家計を助けるために絵をかいてそれを売っていたそうです。

渡辺華山のすごいところは、何事にも真けんに取り組むところです。どこへ行く時にも、常にふところの中に紙をとじた小さな手帳を入れ、道を歩きながらでも、こ

れはいいなあと思うものは、何でもすぐに写生していたそうです。それに絵だけでなく、勉強も絵と同じように真けんに取り組んでいたそうです。ぼくは、渡辺華山のように、何事にも真けんに取り組むことはできないし、やる前から無理だと決めつけてしまうことがよくあります。なので、ちよつとやっただけで無理だと決めつけたりせずにもつと努力してみたい、いろんなことに挑戦していくことでもしかしたら得意なものが見つかるかもしれないなあと思いました。

また、渡辺華山は、殿様があるからこそ、農民が安気にくらしていけると考えられていた時代に、人民にあつてこそ国がなりたつてゆくのだと進んだ考えをもっていたそうです。それに貧ぼうの中に育つたので、人が困っている時には、自分のことのように同情したそうです。渡辺華山は、家老でありながら、貧ぼうな生活をおくっているという事は、よっぽど困っている人に優しくしていたんだと思います。自分も決して楽なくらしではないのに、他の人のことを思いやることができるなんて優しい人だなと思いました。

田原のため日本のために一生けん命力をつくした渡辺華山でしたが、蛮社の獄という事件で、幕府につかまり、牢に入れられ、その後田原で罪人として家にとじこもつてつつしむよう言いわたされてしまったそうです。そして、殿様に迷わくをかけるのをおそれて、49歳で自害したそうです。渡辺華山は自分の行いは間ちがっておらず、正しいと信じていたと思います。そんななか、自害しなくてはいけなかったのは、とても悲しかったと思います。でも、生まれてからなくなるまでずっとみんなのためになることをやり続けていた渡辺華山はえらいと思います。ぼくは、この本が伝えたいことは、渡辺華山のように

心が強く優しい人になってほしいという意味がこめられていると思います。なのでぼくは、渡辺華山のように心が強く優しい人になりたいです。そして、人のためになることをやっていけるようにこころがけていきたいです。

みんなから尊敬されていた華山

和地小学校 六年 藤 井 蒼 衣

この本は、田原藩の家老で、また画家である渡辺華山の一生を書いてある本です。この本をもらったときに、私は歴史が好きなので、読むのがとても楽しかったです。

私は、華山の村の人への思いやりの心に感動してなぜそんなに優しくできるのかなあと考えてみました。

華山の生まれた家は、とても貧しく、その日のお金にも困るくらいでした。私は、それが華山が村の人に優しくできる大きな理由だと思います。小さい頃から大人になるまで、貧しく暮らしていたからこそ、貧しい人の気持ちに共感でき、優しく接することができたのだと思います。でも、私は華山のように、他の人を助けるために、自分が危なくなるような行動は、絶対にできないと思います。華山の、自分のことよりも他の人のことを第一に考えるところは、とても勇気があることだし、私も見習わないといけません。

他にも、華山が思いやりのある人だと感じられるところはたくさんありますが、その中でも、特に心に残ったところは、華山が村の人からのお札を受け取らないところです。田原に新しい田んぼを作るために、海の浅いところをうめる仕事が進められていましたが、海で仕事を

していた人たちは困ってしまいました。しかし、役人には逆らえません。そこで、華山が幕府のえらい人に願い出て、その仕事を取りやめしてもらいました。村の人は喜んで、お金を華山に送りましたが、華山は手紙と一緒に送りがえしてきたのです。貧ぼうな生活をしていたら、お金はほしいはずなのに、決して受け取ろうとしなかった華山の行動は、私にとっては驚きでした。

他にも、華山がすごいと思ったところは、自害をしようとするところです。華山の自殺の理由は、殿様に迷惑がからないようにするためと書いてありました。人に迷惑がからないようにするために自分の命を絶つなんて、私には考えられませんでした。それに、自害するつもりだった日の夜、お母さんが寝付けなかったことだけで、次の日に変更をします。最後の最後まで、人のことを思いやる温かい心を持っていたのだと、感動しました。そして華山が亡くなった後には、墓石をたてるように、親戚や弟子たちが幕府に願い出ました。華山は本当に多くの人に尊敬され、愛されていたのだと改めて分かりました。

この本を読んで、華山の小さいときからの、周りの人を思いやる心や、えらくなっても威張ったり人を見下したりすることなく、昔と同じようにみんなに優しく接する姿に感動しました。そして、亡くなるまでに、本当に多くの人を助けたのだと分かりました。私も、華山のように、人を思いやる優しい心を持ち、みんなに慕われる人になりたいと強く思いました。

華山の田原行（十五）

二月一九日（続）

財政逼迫に対し、田原藩は、康直の持参金や度々の引米により対応してきました。しかし、それでも対応しきれず、前回紹介したように、「ことしハ一千両もたらぬ御ことになり行し」状況になりました。その原因として、華山は、「碩量院様の御普請ハ御孝義に侍ればいはず、御家の御入用御産の御入用など、いにしえにもなき御分外の御奢りともいふべき御冗費にて」と記しています。

「碩量院様の御普請」については、『全楽堂日録』天保二年（一八三一）九月一七日の「碩量太夫人第落成、登画其障成。昨太夫人移第皆賀」、「御産の御入用」については、天保三年康直の夫人西尾氏の出産のことだと思われます。御家の御入用は、『全楽堂日録』天保二年三月一九日の「以本月廿日当默巖公二十三年忌、七月当默笑十七之忌、於浅草松源寺祭霊」の藩主の一族の法要があたると思われますが、細かな内訳を華山は、天保三年十月六日に、次のように記しています。

『全楽堂日録』天保三年二月六日



御立以来助郷御のがれ三百両、難船一件にてそれぞれ御頼雑費百両、琉球人通行道普請百両、御留守居役替式百両と御在所元メの見積と実に御雑費となりたと引合すれば、百五十両も余れど助郷式百両御留守居百両ばかりにてすみたり、去る閏十一月の麴町式丁目失火にて式百両も御臨時」

さらに、藩の出費だけでなく、天保三年は、天保の飢饉の始まる前年でもあり、

「御在所よりハ見積より今年ハ不作にて六千石余之損毛御届となりて、した、かに目算違ひたる

上に、漁獵なく浜方村々困難とて御救ひも賜んと、収入の面も少なく、

「とても江戸御下し金ハ不足せんと申したり。一体江戸よりも御入用の事ハ多く申かけ遣せども、又御在所表より多申かけて困難の事共申こすなれば、猶疑ひハ申せしにもあらじとおもえど、いかにせんとて申出る、江戸御雑費臨時の多き事ハ近年莫大の事にて、常にかくハ申出すれどけふハいと苦しき容に覚ゆ。」

という状況です。このようなことから、千両の赤字になってしまいました。

千両を現在の通貨に換算するのはむずかしいのですが、天保時代の一両は、米価で約四万円、賃金で三〇〇四万円、そばの代金で十二〇十三万円です。江戸時代一石（米一五〇kg）が約一両ということから考えると、億に近い額になります。しかし、このような財政逼迫の中で、天保六年に報民倉を建て米穀を貯蔵するなど凶荒対策を実施して天保の飢饉で一人の餓死者も出さなかったということは、華山及び田原藩の藩政が高く評価できます。

奏者番内願を反対された康直については、「其御志ハ人臣の常ながらか、る御困乏の御中にてハ、たゞ権門賄賂の費弊につかれてなかなか御家も危うならせられんといふ。これを御思召あ



『全樂堂日録』天保三年二月六日

れバまたいつをかぎりに御願出ん折もなければ御
こゝろぐるしく思召より御病となりて、せめてこ
の病を慰んにハ色食ならでハなきとて、いよいよ
御志さまらず、たゞ御年寄を御責なさるゝより外
なく、」(二月一九日)

と、内願反対からのストレスから、家臣を責めて
ばかりの状態となります。そこで、康直は、千両
の赤字にもかかわらず、側女探しをします。

前回紹介したように康直が田原に養子に來た頃
は、「巢鴨様、碩量院様、御奥様よりも御側女の
事御勧なれど、かゝる御窮迫の中なれば唯我が私

に多くのこがねを費さんことを御思召され御辞退
なりし」という様子で、「御初政の美」でした。
しかし、この側女探しの理由が、

「またことし御在城の御つれづれに御側女御
かゝえあらんとて、」(二月一九日)

「つれづれ」という言葉は、吉田兼好の『徒然草』
で有名ですが、することがなくて退屈なこととい
う意味です。本稿第十回で紹介した田原での康直
の様子「かゝる御困難にて御家来百姓もまことに

くるしきかぎりなる中にて、御ひと言も此ために
被仰出たる事なきハいかにや」(二月一五日)と
いう華山の不満に通じるものがあり、養子に來て
五年足らずで、「御初政の美ゆるみ」です。

しかも、側女探しの結果が、
「側女御撰遊れしも、世の人の口にかゝるばか
りのことにて、三河屋某からいだけせし女凡百六十
人に及ぶとぞ。そのふたりハ御抱ありしが、御伽
もせて御暇賜りたり。」(天保三年八月三日)

財政が豊かな藩の藩主ならまだしも、側女候補
として百六十人も女性を召し出させますが、そ
のうち召し抱えたのは、二名。しかも、伽もさせ
ずに暇を出します。

華山は、このことを、二月一九日にも記してい
ます。

「こぞの春より都下にて百六十人も御目見えあ

れど、又御奥の女中ども、妬のこゝろよりかれハ
あしく、これハよろしからじなどいふに、御こゝ
ろ移りて二人まで御かゝえありしも一夜も御枕席
に侍るものなくて御暇玉りたり。そが中に御元
へ被為入たれば、御跡より撰て奉りしも又御思召
にかなハで御暇玉りたり。」

この側女探しの出費が、「それこれ合せかぞふ
れば、これも百両余御費なりしとぞ。」(八月三日)
と、約百両。

奏者番の件、自分の思い通りにならない数々の
ことからの我儘、過酷な減俸、藩財政の赤字千両、
このような事実から、「かゝる飢にもいたりなん
とせるなかに、まこと御暴政ともいふべきにや。」
(八月三日)と、華山にとって康直の藩政は「御
暴政」と映ります。そして、「これまつりごとに
あづかるもの、罪にしあれば、」(同)と見解を述
べます。

八月三日の記述は、江戸にいた華山のもとへ届
いた佐藤半助からの手紙で知ったことなので、「上
を申上るいハ及ばぬなれど、愁るまゝに記しぬ。」
(同)と、『全樂堂日録』への記述だけで終わって
いますが、田原に來てからは、今まで紹介したよ
うに康直に諫言しています。

研究会員 柴田雅芳

(続)

華山会報索引

本索引は第二十一号より第三十号に掲載された内容を収録しました。

◆巻頭言◆

- 第二十一号 華山・万次郎・諭吉：川澄哲夫 一頁
- 第二十二号 客坐掌記（天保三年）に描かれた肥満英国人：松田清 一頁
- 第二十三号 華山が見いだした農業指導者・大蔵永常：平井義人 一頁
- 第二十四号 華山先生と井上竹逸：成澤勝嗣 一頁
- 第二十五号 渡辺華山と鬚光と：牧野研一郎 一頁
- 第二十六号 関東南画という言葉：安村敏信 一頁
- 第二十七号 渡辺華山筆《溪澗野雉図》と椿椿山筆『足利遊記』について：月本寿彦 一頁
- 第二十八号 絵が取り結ぶ華山と大蔵永常との縁：有蘭 正一郎 一頁
- 第二十九号 本間祐介氏と渡辺華山のこと：田中章夫 一頁
- 第三十号 オーデマンス「一八二四年ノ略史」の原本は東京大学に所蔵されていた：華山・史学研究会 一頁

◆地元の声◆

- 第二十一号 華山先生が描く馬：山田俊郎 二頁
- 第二十二号 華山の里を歩く（ガイドの体験から）：林和彦 二頁
- 第二十三号 小澤耕一氏の思い出 二頁
- 第二十四号 郷土の歴史を学ぶ：河合照人 二頁
- 第二十五号 渡辺亘祥氏の思い出 二頁
- 第二十六号 田原の歴史を知ること、田原を愛すること：山本明子 二頁
- 第二十七号 歴史を発見する：眞木正五 二頁
- 第二十八号 郷土の歴史と渡辺華山との関わり：神谷康元 二頁
- 第三十号 ふるさと学習と嚶鳴フォーラム：山本栄子 三頁

◆画家渡辺華山の心象◆

- 第二十一号 臨摹仇英洗硯之図（田原市博物館蔵）：磯部奈三子 三頁
- 第二十二号 鍾馗図（田原市博物館蔵）：磯部奈三子 三頁
- 第二十三号 秋草小禽図（田原市博物館蔵）：鈴木利昌 三頁
- 第二十四号 風竹図（田原市博物館蔵）：鈴木利昌 三頁
- 第二十五号 林述斎肖像稿（田原市博物館蔵）：鈴木利昌 三頁
- 第二十六号 千山万水図：鈴木利昌 三頁

- 第二十七号 御母堂榮之像画稿（田原市博物館蔵）：鈴木利昌 三頁
- 第二十八号 馬図（絵馬）：鈴木利昌 三頁

◆特集記事◆

- 第二十一号 華山会報索引 十三頁
- 臨時号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 一頁
- 第二十七号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十頁
- 第二十九号 嚶鳴フォーラム開催について 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 二頁

◆博物館所蔵品から◆

- 第二十三号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』①七頁
- 第二十四号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』②八頁
- 第二十五号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』③八頁
- 第二十六号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』④八頁
- 第二十七号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑤八頁
- 第二十八号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑥八頁
- 第二十九号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑦八頁
- 第三十号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑧八頁

◆資料紹介◆

- 第二十一号 渡辺華山外国事情書⑤：渡辺亘祥 四頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(3) ……山田哲夫 八頁

第二十六号

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

渡辺華山『俳画冊』鑑賞(4) ……山田哲夫 八頁

秀 十二頁

平成二十二年華山・史学研究会研修視察

立原杏所を訪ねる―水戸の旅：鈴木利昌 十二頁

華山の田原行(十) ……柴田雅芳 十四頁

華山の田原行(十一) ……柴田雅芳 十四頁

平成二十三年華山・史学研究会研修視察

小関三英の生誕地―鶴岡・酒田の旅：鈴木利昌 十頁

華山の田原行(十二) ……柴田雅芳 十四頁

華山の田原行(十三) ……柴田雅芳 十四頁

平成二十四年度華山・史学研究会研修視察

だんじりの町岸和田と中世からの商業都市：堺を訪ねる：木村洋介 十二頁

華山の田原行(十四) ……柴田雅芳 十四頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

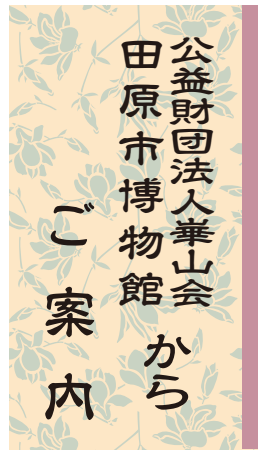
財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

財団法人華山会・博物館からご案内 十六頁

◆ 会員から ◆

◆ 田原市博物館からご案内 ◆



企画展のご案内

十月十九日(土) ～十一月二十四日(日)

特別展 渥美窯 国宝を生んだその美と技

(企画展示室一・二)

講演会 十一月十日(日) 午後一時三十分～ 華山会館 入場無料
演題「日本の美の源流―国宝・秋草文壺の魅力に迫る」

講師・学習院大学教授 荒川正明氏

◎考古学シンポジウム「渥美窯編年の再構築」十一月二日(土) 午前十時～午後四時 華山会館 入場無料(先着一四〇名)

◎見学ツアー「渥美窯のふるさとを巡る」十一月三日(日) 午前十時～午後四時 田原市内 参加無料(要申込)

同時開催・渡辺華山名品展(特別展示室)十一月三十日(土) ～平成二十六年一月十三日(月・祝)

企画展 没後50年―松林桂月展―水墨画を極め、画中に詠う

(特別展示室、企画展示室一・二)

渡辺華山の弟子野口幽谷に師事し、文化勲章を受章した松林桂月の作品約八〇点を展示します。展示替あり。

◎講演会 十二月二十三日(月・祝) 午後一時三十分～ 華山会館 入場無料
演題「素顔の松林桂月」

講師・松林明氏(桂月の孫)

◎展示解説 十二月十五日(日)、一月十二日(日) 午前十一時～ 当館副館長 鈴木利昌

平常展のご案内

一月十八日(土) ～二月十六日(日)

渡辺華山が学ぶ(特別展示室)

重要文化財渡辺華山旧蔵書籍などを展示します。
定文化財渡辺華山旧蔵書籍などを展示します。

二月二十二日(土) ～四月六日(日)
渡辺華山と弟子たち(特別展示室)

福田半香、永村茜山、椿華谷、立原春沙作品などを展示します。

ひな人形と初風展 (企画展示室)

田原の旧家に伝わったひな人形や田原風保存会制作の初風などを展示します。期間中スタンプリーを開催します。

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています(十二月・一月は休館)。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展 一般五〇〇円(四〇〇円)

企画展開催時は小・中学生無料
平常時 一般 二一〇円(二六〇円)
小・中学生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十人以上の団体料金
休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

十二月二十八日から一月四日

(公財)華山会から 華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ

見学会に参加できます。博物館だより(年数回)・華山会報をお送りします。

華山会報 第三十一号

平成二十五年十一月一日発行
編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿
常務理事 菰田稀一
事務局長 讃岐俊宣

〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江二の二

TEL〇五三二・二二二・一七〇〇
FAX〇五三二・二二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館
華山・史学研究会

吉川利明 山田哲夫
林 和彦 別所興一
林 哲志 中村正子
小川金一 柴田雅芳
加藤克己 中神昌秀
石川洋一 小林一弘
増山禎之 磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 平成二十六年四月十一日